

(講演要旨)

オスとメス＝進化の不思議

総合研究大学院大学名誉教授

長谷川真理子

昨今は、LGBTQ という表現が当たり前に使われるようになり、これらの人々の人権に対する配慮が進んできた。一昔前には考えられなかったことで、この変化は大変に喜ばしい。一人の人間が自分自身を男だと思うのか、女だと思うのか、そこには、からだの外見とは別に脳の働きがあり、それは本人の選択の問題ではない。そして、生まれてきた文化の中では、男は男として、女は女として振る舞わねばならない。LGBTQ の人々は存在しないことにされ、男か女かに振る舞わされてきた。そこに息苦しさを感じるのは、まさに女である私も、その通りだと思う。これは文化とジェンダーの問題だ。

それでは、生物学的に見て「性」というものは、本来あいまいで連続的なのかと言うと、そうではない。そもそも、性は生殖とは関係なく、何十億年も前に単細胞生物が他個体と遺伝子を交換して、自分自身に遺伝的変異を生み出す方策として進化した。

ところがその後、単細胞生物から多細胞生物が出てきたときに、大きな変化が生じた。多細胞生物は、一つのからだの中にいろいろな機能に特化した器官が共存して一個体を形成する。その中で繁殖に特化した器官ができ、それが排出する配偶子という細胞ができた。その結果、大きくて栄養があるが運動能力の低い卵子と、栄養がなくて小さく運動能力の高い精子という2つの配偶子が進化した。だから、多細胞生物の性と言え、精子を生産するオス機能と、卵子を生産するメス機能しかない。

しかし、多細胞生物の一つの個体が、オスとメスのどちらの生殖機能を担う個体になるかには、いくつかのやり方がある。両方を一つのからだに備えて生きるのが雌雄同体、時間とともにオス機能とメス機能を変えるのが性転換、最初から専門のオスか専門のメスに決めるのが雌雄異体である。ヒトは雌雄異体だが、からだと脳の性分化に2つの異なる過程がある。さらに文化とジェンダーの問題があるので、複雑なのだ。